巻頭言

10年を超えて，さらに歩み続ける

作業療法学専攻　青　山　　宏

西九州大学大学院生活支援科学研究科リハビリテーション学専攻と書いてくると，ずいぶん長い名称である。平成19年に，西九州大学にリハビリテーション学部が開設されてから満11年となる。学部開設とともに，時をおかずに研究への志向性を確立しようと大学院開設を目指すこととなった。リハビリテーション学専攻の設立を目指したいが，まずは，既存の大学院健康福祉学研究科の中にリハビリテーションコースを設けることとして，平成21年にコースが開設された。そして，平成26年に大学院の再編に伴い健康福祉学研究科から，現在の生活支援科学研究科に研究科の名称が変更されると同時に，リハビリテーション学専攻として念願の分離独立した専攻となった。

この間，リハビリテーション学専攻としての大学院の発展に向けてさまざまな試行が行われた。それは，まず，先述した既存の大学院健康福祉学研究科の中にリハビリテーションコースを設けると同時に，本学での初めてとなる博士課程開設を独自に目指すこととなった。それに向け，大学院博士課程設置検討委員会を立ち上げることにした。そこでは，リハビリテーションおよび社会福祉の２領域を結合する構想として健康生活支援学を根幹概念とした。しかし，新たな学問概念としての健康生活支援学という枠組みを十分に説明できなかったことや教員組織の実現性などの問題から申請を取り下げざるを得なかった。ひとえに私の力不足であるが，熱心な支援をいただいた学長，片渕事務局長，北島事務次長，小野企画室長に感謝とお詫びを申し上げたい。この生活支援というキーワードは，今へとつながっているともいえる。その後，リハビリテーション学専攻修士課程設置から博士後期課程設置を目指す試みの後，今の生活支援学研究科内での専攻設置へとつながってきたのは周知のとおりである。

大学院生について振り返ると，リハビリテーションコースの開設に伴って，まず１期生として５名の院生が入学してくれた。その後，リハビリテーション学専攻の開設に伴い，５名の院生が入学してくれ，現在までに合計33名の院生が大学院を修了してくれた。現在は，１年次，２年次を併せて12名の院生が在籍しており，それぞれの学問的興味に根差した貴重な研究を続けてくれている。修了生からは，複数名の大学教員や高度な専門職が巣立っている。今後のリハビリテーションの発展に多いなる貢献をしてくれることと期待している。

コース設置の頃は，雑然とした雰囲気のなかで粗削りだが，懇親会などを通して他のコースとの交流がもっとあったように思う。たとえば，私の講義にも他専攻の学生が参加してくれていた。現在は，専攻の分離に伴い専門性は高まったことは喜ばしいことだが，半面，他の専攻の院生や教員との交流や討議が少なくなってきているように思う。生活支援のためには，よりチーム連携や協業が求められている。以前のままではなくとも，他領域の専門性に基づいた院生同士の交流や教員との交流を通した共同研究や現場レベルでの情報交換や協業に結び付いて欲しいと願っている。今後に続く新たな歩みに期待しつつ。